

仙台市文化財調査報告書第 268 集

王ノ壇遺跡

—第5次発掘調査報告書—

2003年7月

仙台市教育委員会

例　　言

1. 本書は、共同住宅建設に先立って行った王ノ壇遺跡第5次発掘調査の報告書である。
2. 図面整理は佐藤甲二・鈴木隆が、出土遺物の整理は平間亮輔が担当した。本書の執筆は鈴木が、また編集は佐藤・鈴木が行った。
3. 出土した陶磁器の産地、年代については仙台市立博物館 佐藤洋氏よりご教示を頂いた。
4. 本調査における出土遺物、図面、写真等の資料は仙台市教育委員会で一括保管しているので、活用されたい。

凡　　例

1. 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原)を使用した。
2. 本書中の地形図には国土地理院発行の2万5千分の1「仙台西南部」、「仙台東南部」を合成したものを使用した。
3. 本書使用している方位は真北で統一している。
4. 図中の座標値は、平面座標系Xによっている。
5. 本書中の遺構略号は以下のとおりに表している。

SD：溝跡 SK：土坑

6. 遺物の登録には、以下の略号を使用した。
C：非口クロ成形の土師器 E：須恵器 G：土師質土器 I：陶器
J：磁器 K：石器・石製品 N：金属製品 P：土製品
7. 陶磁器の実測図中、中軸線が1点鎖線のものは反転実測したものである。

目　　次

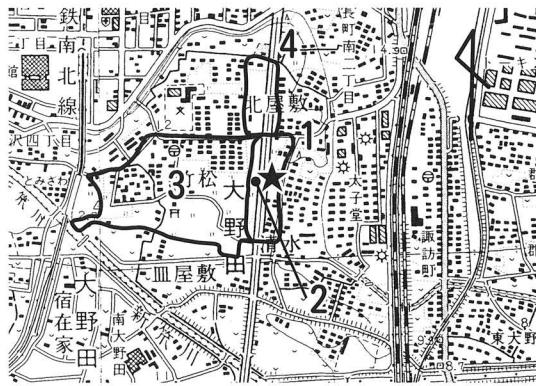
I 遺跡の概要	1
II 第5次調査の概要	1
1. 調査概要	
2. 調査方法	
3. 基本層序	
4. 調査概要	
III 検出遺構と出土遺物	4
1. SK1	
2. SD1	
3. SD2	
4. SD3	
5. SD4	
6. IV層水田跡	
IVまとめ	8

I 遺跡の概要

遺跡は仙台市地下鉄富沢駅の東約800mの太白区大野田に位置し、名取川の支流、笊川の右岸に形成された自然堤防上に立地している。遺跡は東側（旧笊川方面）に下がる緩斜面上にあり、標高は10~11mである。これまで本遺跡では1~4次の調査が行われており、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明している。昭和63年から平成3年にかけて実施された1次調査では、鎌倉時代頃の武士階級の屋敷跡とそれに隣接する宗教施設の跡、火葬墓、道路跡、区画溝等が検出されている。今回の第5次調査区（★印）は、1次調査I区北半で検出された中世全体区画溝の延長線上に位置している。

遺跡周辺には、王ノ壇古墳（2）多数の古墳群及び中世の道路跡が検出された大野田古墳群（3）、多量の縄文土器や土偶が出土した大野田遺跡（4）、また、北側には後期旧石器時代の石器や埋没林に加え、弥生時代から続く複数の水田跡が重層的に検出された富沢遺跡、北東には7世紀代にさかのぼる官衙遺跡である郡山遺跡など、仙台市内でも特に重要な遺跡が複数存在する。なお、王ノ壇遺跡のより詳しい自然及び歴史的環境については、王ノ壇遺跡第1次調査発掘調査報告書に記載があり、これを参照されたい（仙台市教育委員会2000）。

参考文献：仙台市教育委員会（2000）「仙台市 王ノ壇遺跡—都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡—発掘調査報告書I」『仙台市文化財調査報告書第249集』



第1図 遺跡位置図 (1/25000)

1. 王ノ壇遺跡 2. 王ノ壇古墳 3. 大野田古墳群 4. 大野田遺跡

II 第5次調査の概要

1. 調査要項

遺跡名 王ノ壇遺跡（宮城県遺跡番号01428 仙台市文化財登録番号C-309）

所在地 仙台市太白区大野田字北屋敷21-1、22-1の各一部、19-1、20、37、21-1の地先水路

調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）

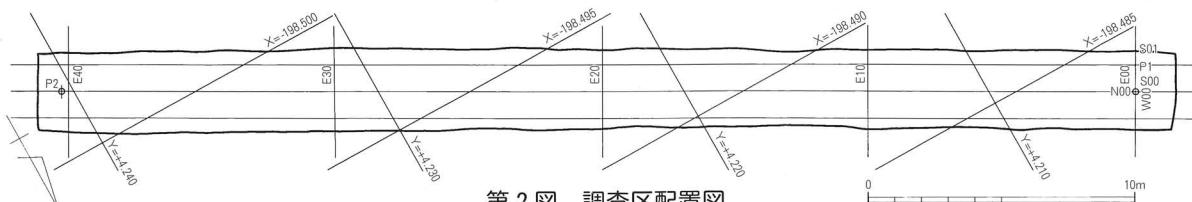
調査担当 調査係主査 佐藤甲二 同主事 鈴木 隆

調査期間 平成15年6月9日～同年6月12日

調査面積 約126m²

2. 調査方法（第2図）

建設予定地に3×42mで、約126m²の調査区を設定した。調査区の両端2ヶ所にP1（西）、P2（東）を設けた。それぞれの平面直角座標系Xにおける座標値は、P1がX=-198.483km、Y=4.205km、P2がX=-198.502km、Y=4.240kmで、2点間の距離は40.246mである。P1とP2を結ぶ東西ラインを基軸線とし、P1を00に、1m間隔で東方向はE01、E02、E03…、西方向はW01、W02、W03…とした。南北方向についても同様に、それぞれS01、S02…、N01、N02…とした。



第2図 調査区配置図

3. 基本層序

調査区内における基本層序はⅠ～Ⅵ層である。なお、現地表面直下には調査区全域にわたって0.5～1.2mの盛土層があり、基本層序はその下層より命名したものである。以下、各層の特徴について述べる。

Ⅰ層：オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト。断続的ではあるが、調査区のほぼ全域に分布している。層厚は10～40cmで、上部は部分的に盛土によるかく乱を受けている。下面にはやや起伏が認められる。鉄分の集積は見られない。現代以降の水田土壤である。

Ⅱ層：暗灰褐色（2.5Y4/2）砂質シルト。Ⅰ層と同様、断続的に調査区全域に分布している。層厚は10～20cmである。下面には緩やかな起伏が認められる。鉄分の集積は見られない。近世以降の水田土壤か。

Ⅲ層：灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルト。調査区東側にのみ分布している。層厚は10～20cmである。下面には起伏が認められる。近世以降の水田土壤か。

Ⅳ層：灰黄色（2.5Y6/2）シルト。細砂をブロック状に少量含む。Ⅰ、Ⅱ層と同様、断続的に調査区全域に分布している。層厚は10～15cmである。下面には顕著に起伏が認められる。下部に下層ブロックを含む。鉄分の集積は見られない。近世末以降の水田土壤である。

Ⅴ層：灰オリーブ色（5Y6/2）砂質シルト。調査区西側のみに分布する。層厚は5～10cmと薄い。下面には顕著に起伏が認められる。下層ブロックを含む。鉄分の集積は見られない。近世初頭の水田土壤か。

Ⅵ層：黄褐色（2.5Y5/4）砂質シルト。調査区全域に分布する。層厚は50cm以上になると考えられる。なお本層は、前述した1次調査における基本層序Ⅵ層に対応するものと考えられる。1次調査においては、Ⅵ層上面が古代及び古墳時代中期の古墳などの検出面とされている。

ほとんどの遺構が確認されたⅥ層上面での地形をみると、全体的には西から東にかけて下り傾斜となっており、調査区の東西端では約1.5mの標高差が認められる。また、E11～E12の間に比高差約50cmのやや急な傾斜（以下段差）が確認された。しかしこの部分の傾斜が自然地形を反映したものか、後世の掘削によってつくり出されたものかは不明である。それ以後の基本層もこれらの地形を反映した状態で堆積している。

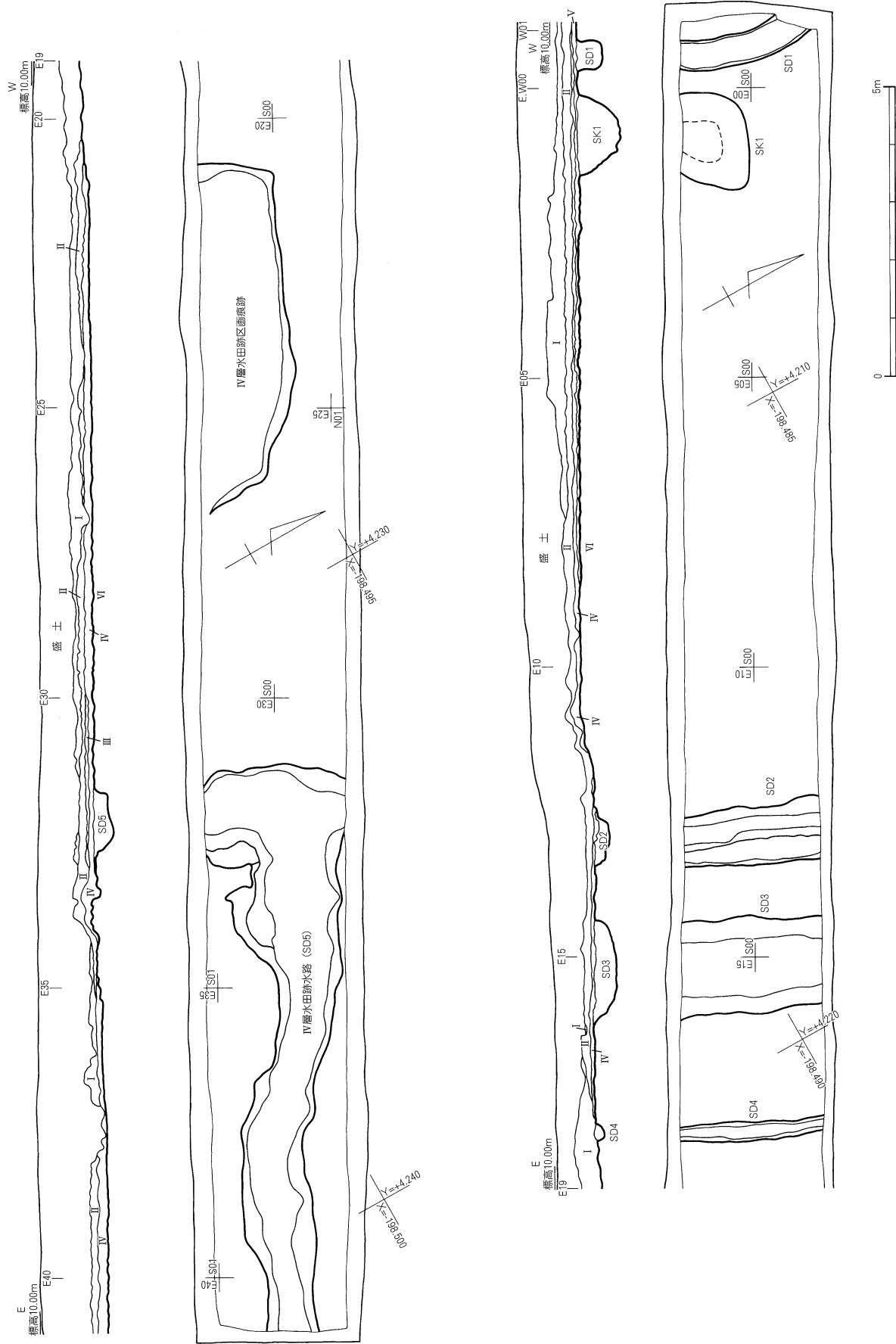
4. 調査概要

平成15年6月9日より作業開始。重機により盛土層及び遺構検出直上面まで掘削を行い、その後は人力による精査を行った。遺構の測量は、後述の基準点P1を利用した簡易遣り方によって1/20の遺構全体図を作成し、調査区断面図、遺構断面図についても1/20の実測図を作成した。記録写真については全てデジタルカメラによって行った。平成15年6月12日、全ての作業を終え調査終了。

第5次調査では、土坑1基（SK1）、溝跡4条（SD1～4）、水路跡1期（IV層水路跡及びこれに伴う区画、水路-SD5-）、水路跡1条（SD5）の各遺構が検出された（第3図）。遺構確認面はいずれもⅥ層上面で、重複関係はない。遺構は最も標高の高い西端にSK1、SD1が位置しており、段差をおりてすぐSD2、SD3、SD4と続く。そしてIV層水路跡、水路跡（SD5）が最も低い東側に位置している。

遺物は175点出土している（表1）。基本層からの出土はなく、全体の約90%はIV層水路跡の区画及び水路跡（SD5）からの出土である。時期的に古い遺物としては、ピエスエスキーユ、凹石や非クロの土師器などが挙げられる。出土遺物のほとんどは陶器、磁器である。13～14cの中世陶器、16c、16～17cの陶器、磁器が数点ある他、特に18～19c前半の資料が最も多く出土している。陶器、磁器のほかには、砥石、硯、土人形、古錢、蹄鉄などが出土している。

第3図 調査区構造配置図・南壁断面図



III 検出遺構と出土遺物

1. SK1 (第4図 図版1-4、5)

E00～E02の間に位置する。平面形は調査区南壁にかけて全体の2/3程が確認されている。上端規模は東西約1.7m、南北約1.3m以上で、深さは約0.7mである。平面形は上端が不整円形、下端は掘りすぎのため不明である。断面形はやや開き気味のU字形を呈する。堆積土は2層から成り、堆積土2層はVI層土とV層土の混合土で人為的に埋められたものである。遺物は埋土2層中より17c初頭頃の、志野産の陶器が1点(1)出土したのみである。

2. SD1 (第4図 図版1-1～3)

W00の西側、調査区の最も西端に位置する。上端幅は約0.5m、深さ約0.5mである。溝幅はほぼ一定で、西側に対しやや内湾する、弧状を呈する。断面形はややオーバーハングしている。底面は部分的に凹凸を有するものの、概ね平坦である。堆積土は4層に分けられるが、基本層序中にはみられない黒色土を含み、VI層以降に堆積した旧表土が堆積したものと考えられる。遺物は堆積土1層中より非ロクロの土師器が2点(2)出土している。

3. SD2 (第4図 図版1-6、8、10)

E12～E14の間に位置する。上端幅0.8～1.1m、深さ約0.3mである。方向はN-22°-Eで、直線的である。上端幅は北側でやや広くなる。断面形は東半部が10cmほど一段浅くなっている、階段状となっている。底面は概ね平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は3層に分けられ、そのうち堆積土3層についてはより古い溝跡のものである可能性もある。しかし、他の堆積土との間に、異なる遺構とするだけの土層の違いが見られないことから、可能性を指摘するに止めたい。遺物は堆積土2層中より、凹石1点(3)、石製品2点が出土している。

4. SD3 (第4図 図版1-6、7、11)

E14～E16の間に位置する。上端幅約1.5～1.7m、深さ約0.4mである。方向はN-29°-Eで直線的である。溝幅は北側で若干狭くなる。断面形は開いたU字形で壁も緩やかに立ち上がる。堆積土は2層から成り、下層は粘質土で上層は粗砂をラミナ状に多量含む。遺物は出土していない。

5. SD4 (第4図 図版1-9)

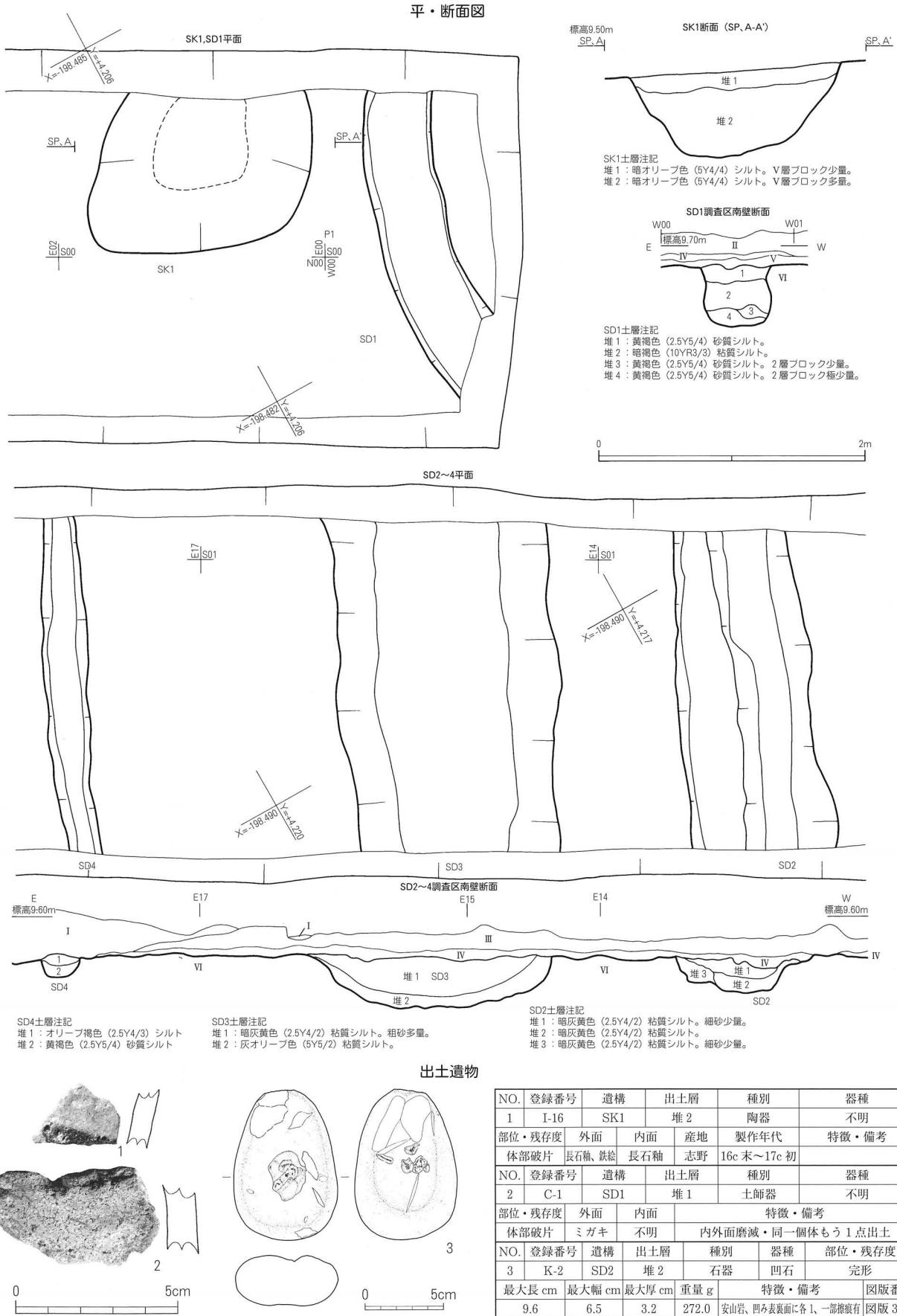
ほぼE18のライン上に位置する。上端幅約0.3～0.4m、深さ約0.2mである。方向はN-26°-Eで直線的である。溝幅は南北両端部でやや狭くなる。断面形はU字形である。底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりはSD2と同様やや急である。堆積土は2層に分けられ、下層にはVI層土が混入する。遺物は出土していない。

6. IV層水田跡 (第3、5、6図 図版2-12～17)

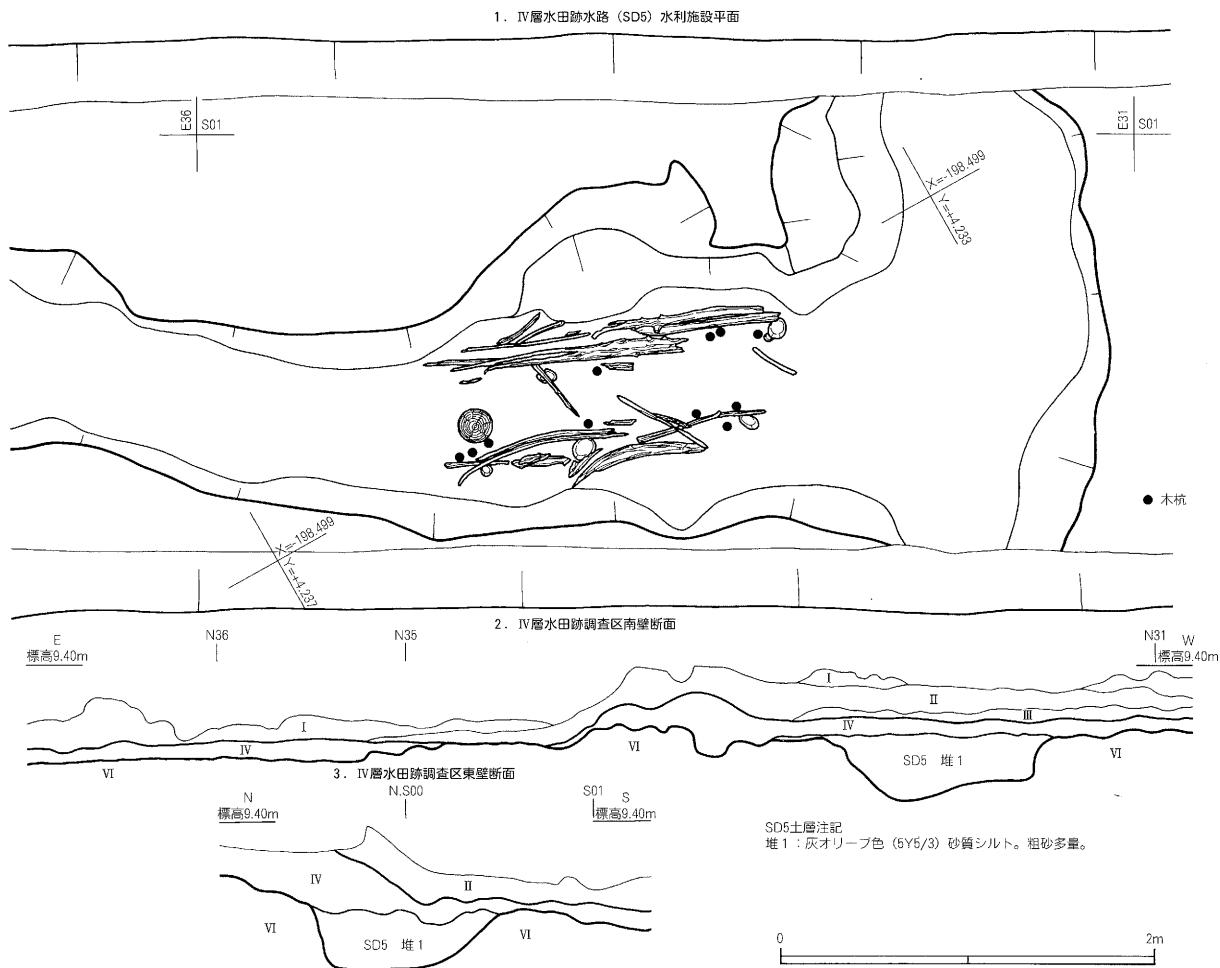
調査区全域に耕作土の広がりが認められた。水田上面は、上層のかく乱による削平を受けており、残存状況は悪い。上面の標高は9m前後で、東側への緩やかな下り傾斜を示す。調査区東半で、水田区画の痕跡が1区画と水路(SD5)が検出されたが、畦畔は調査開始時の重機による掘削のため、平面的に確認することができなかった。耕作土は灰黄色(2.5Y6/2)シルト(基本層IV層)で層厚は平均約10cmである。下面是起伏が顕著で、下層を巻き上げたブロックが少量認められるが、鉄分の集積は見られない。なお、当水田跡は水路が付いた段階(古期)、これを埋めた段階(新期)の2時期の変遷が認められた。

<畦畔> 畦畔は調査区南壁・東壁・北壁の断面観察により、新期の段階のもので確認されている。南北水路の東側に幅約50cmで約20cmの高まり(第5図-2)、東西水路上から北側に幅1m以上で30cm以上の高まり(第5図-3)を持つものである。直下層のVI層上面には、擬似畦畔Bが形成されている。また、II層段階も同様の盛り上がりが認められ、畦畔の踏襲が観察される。

<区画> 区画の痕跡として確認された。E20～E27の間に位置し、VI層の凹部として検出されている。方形区画で、規模は東西約6.0m(N-121°-E)、南北1.7m以上である。また区画内東半部のVI層上面において、馬か牛



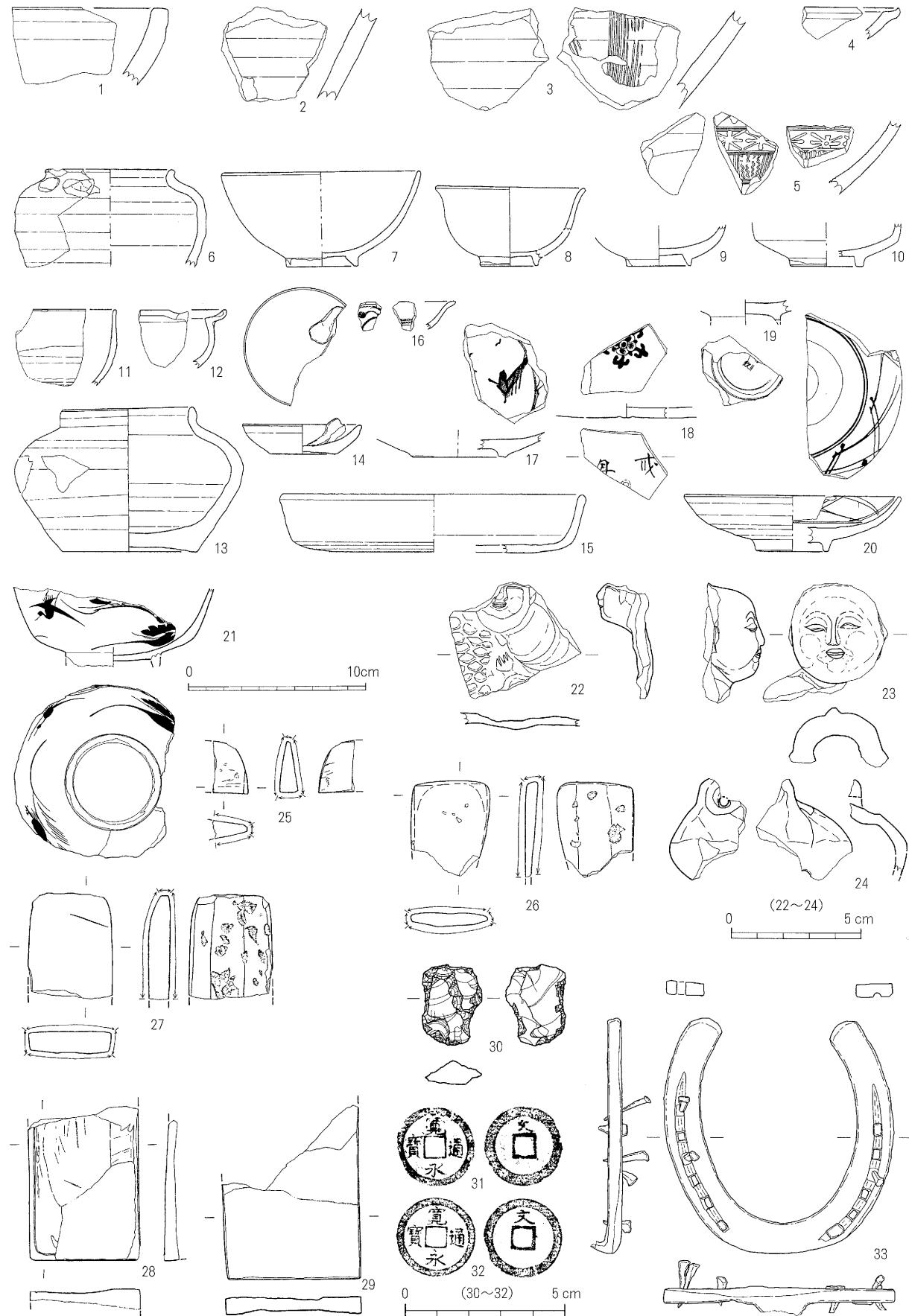
第4図 SK1、SD1~SD4 平・断面図及び出土遺物



第5図 IV層水田跡平・断面図

IV層水田跡出土遺物観察表

NO.	登録番号	遺構	出土層	種別	器種	部位・残存度	口径 cm	底径 cm	器高 cm	产地	製作年代	外面	内面	特徴・備考	図版番号
1	I-15	SD5	堆	陶器	鉢	口縁部	不明	不明	不明	在地	13~14c	ロクロ目、露胎	ロクロ目、露胎		図版 3-1
2	I-14	SD5	堆	陶器	鉢	体部破片	不明	不明	不明	不明	13~14c	ロクロ目、露胎	ロクロ目、露胎		図版 3-2
3	I-13	SD5	底面	陶器	折鉢	体部破片	不明	不明	不明	白石窯	13~14c	ロクロ目、筋目、露胎	筋目単位 10~11、にぶい 赤褐色		図版 3-3
4	I-5	SD5	底面	陶器	折縁皿	口・不明	不明	不明	不明	瀬戸美濃	16c	灰釉	灰釉		図版 3-4
5	I-10	SD5	堆	陶器	大鉢	体部破片	不明	不明	不明	津浦	17c 後半~18c 前半	上半露胎、下半鉄釉	長石釉、範模文		図版 3-5
6	I-11	SD5	底面	陶器	耳付水注?	口~体・1/5	7.4	不明	不明	岸窯系	17c	鉄釉	鉄釉		図版 3-6
7	I-4	SD5	堆	陶器	碗	口~底・1/8	11.4	4.1	5.5	相馬	18c	白濁釉	白濁釉	高台内外面とも露胎	図版 3-8
8	I-3	SD5	底面	陶器	端反碗	口~底・1/2	8.8	3.4	4.6	相馬	19c 前半	白濁釉、貫入	白濁釉、貫入	高台下端から内面露胎	図版 3-7
9	I-6	SD5	底面	陶器	碗	体~底・1/3	不明	3.7	不明	相馬	18c	白濁釉	白濁釉	高台下端から内面露胎	図版 3-9
10	I-7	水田区画	耕作土	陶器	碗	体~底・1/5	不明	4.2	不明	相馬	18c	白濁釉、貫入	白濁釉、貫入	高台内面露胎	図版 3-10
11	I-9	SD5	堆	陶器	掛寸分付鏡	口~体・不明	不明	不明	相馬	18c	上半灰釉、下半鉄釉、 貫入	灰釉、貫入		図版 3-11	
12	I-8	SD5	堆	陶器	鏡	口~体・不明	不明	不明	相馬	18~19c	白濁釉	白濁釉		図版 3-12	
13	I-2	SD5	底面	陶器	小壺	口~底・2/3	7.8	7.7	8.4	斐?	19c 前半	黒釉	黒釉	底部外面露胎	図版 3-13
14	I-1	SD5	底面	陶器	灯明皿	口~底・2/3	6.8	3.8	1.7	斐?	18or19c	鉄釉	鉄釉、火はね痕	外外面分付着	図版 3-14
15	I-12	SD5	底面	陶器	培格	口~底・1/5	17.6	16.0	3.4	堤?	19c 前半?	鉄釉	鉄釉		図版 3-15
16	J-5	SD5	底面	磁器	端反皿?	口~体・不明	不明	不明	不明	中固	16c	染付	染付		図版 3-16
17	J-3	SD5	底面	磁器	皿	底部・不明	不明	5.4	不明	肥前	17c	染付	染付		図版 3-19
18	J-2	SD5	底面	磁器	皿	底部・不明	不明	不明	不明	肥前	17c 末~18c 初	文字文	見込五弁花纹		図版 3-18
19	J-4	SD5	堆	磁器	碗?	底部・不明	不明	4.0	不明	肥前	17~18c	染付	染付	取付付高台、高台内面に 文字文?	図版 3-20
20	J-1	SD5	底面	磁器	皿	口~底・1/3	12.5	4.2	3.3	肥前	18c	染付	染付		図版 3-17
21	L-1	SD5	堆	木製品	漆器碗	体~底・2/3	不明	5.5	(4.5)	-	18~19c?				図版 3-24
NO.	登録番号	遺構	出土層	種別	器種	部位・残存度	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	産地	製作年代	特徴・備考			図版番号
22	P-2	SD5	底面	土製品	土人形	頭部・不明	(4.6)	(5.0)	(2.0)	堤?	18~19c?	仏?			図版 3-22
23	P-1	SD5	堆	土製品	土人形	頭部正面・不明	(4.6)	(4.9)	(2.3)	堤?	18~19c?	仏?			図版 3-21
24	P-3	SD5	底面	土製品	土鈴	紐部・不明	(4.2)	(4.3)	(1.5)	堤?	18~19c?				図版 3-23
NO.	登録番号	遺構	出土層	種別	器種	部位・残存度	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g		特徴・備考			図版番号
25	K-5	SD5	堆	石製品	砥石	破損・不明	(2.9)	(2.0)	(1.0)	5.6		一部擦痕有			図版 3-29
26	K-4	SD5	堆	石製品	砥石?	破損・1/2	(5.3)	4.3	0.8	22.0		擦面3面、長軸方向に擦痕			図版 3-28
27	K-3	SD5	堆	石製品	砥石	破損・1/2	(5.8)	4.8	1.2	57.5		表面・側面に擦痕有、擦痕は長軸方向			図版 3-27
28	K-6	SD5	底面	石製品	硯	破損・2/3	(8.8)	5.1	(1.2)	82.0		粘板岩			図版 3-30
29	K-7	SD5	底面	石製品	温石?	破損・1/2	(9.9)	7.5	(1.0)	99.5		粘板岩			図版 3-31
30	K-1	SD5	底面	石器	ピエスヌスキュー	完形	2.4	1.7	0.7	4.0		铁石英、一部棱線摩滅、付着物・受熱痕なし			図版 3-25
31	N-3	SD5	底面	金属製品	古錢	完形	2.5	-	-	2.3		寛永通宝			図版 3-33
32	N-2	SD5	底面	金属製品	古錢	完形	2.5	-	-	1.6		寛永通宝			図版 3-34
33	N-1	水田区画	耕作土	金屬製品	踏鉄	完形	13.4	13.0	0.8	264.0		混入品			図版 3-32



第6図 IV層水田跡出土遺物

と考えられる動物の足跡が1列確認された。

＜水路跡（SD5）＞ 水路は古期に伴うもので、新期の耕作土を掘り上げた段階で、E31 ラインから調査区の東壁にかけて検出された。E32 ラインでほぼ直角に T 字状に交わる東西水路（N-121° - E）と南北水路からなり、東西水路はやや蛇行している。幅は、東西水路では 0.8~1.2m、南北水路では約 1.2m である。深さは 0.2~0.3m である。断面形は U 字形を呈するが、底面には凹凸が顕著である。壁は比較的急に立ち上がり、一部は水流の影響で壁がえぐられオーバーハングしている。堆積土は1層のみで部分的に多量の砂を含む。

東西水路内 E32~E35 の位置で、2 本の杭列と長さ 1 m 前後の自然木 10 数本を組み合わせた水利施設が検出された。大きさは南北約 0.8m、東西約 2 m で、東西水路に対し長軸がほぼ平行するように設置されている。製作手順をみると、まず杭を 2 列設置した後、同列内の杭間に径 10~20cm の川原石を配し、その上に自然木を組み合わせている。

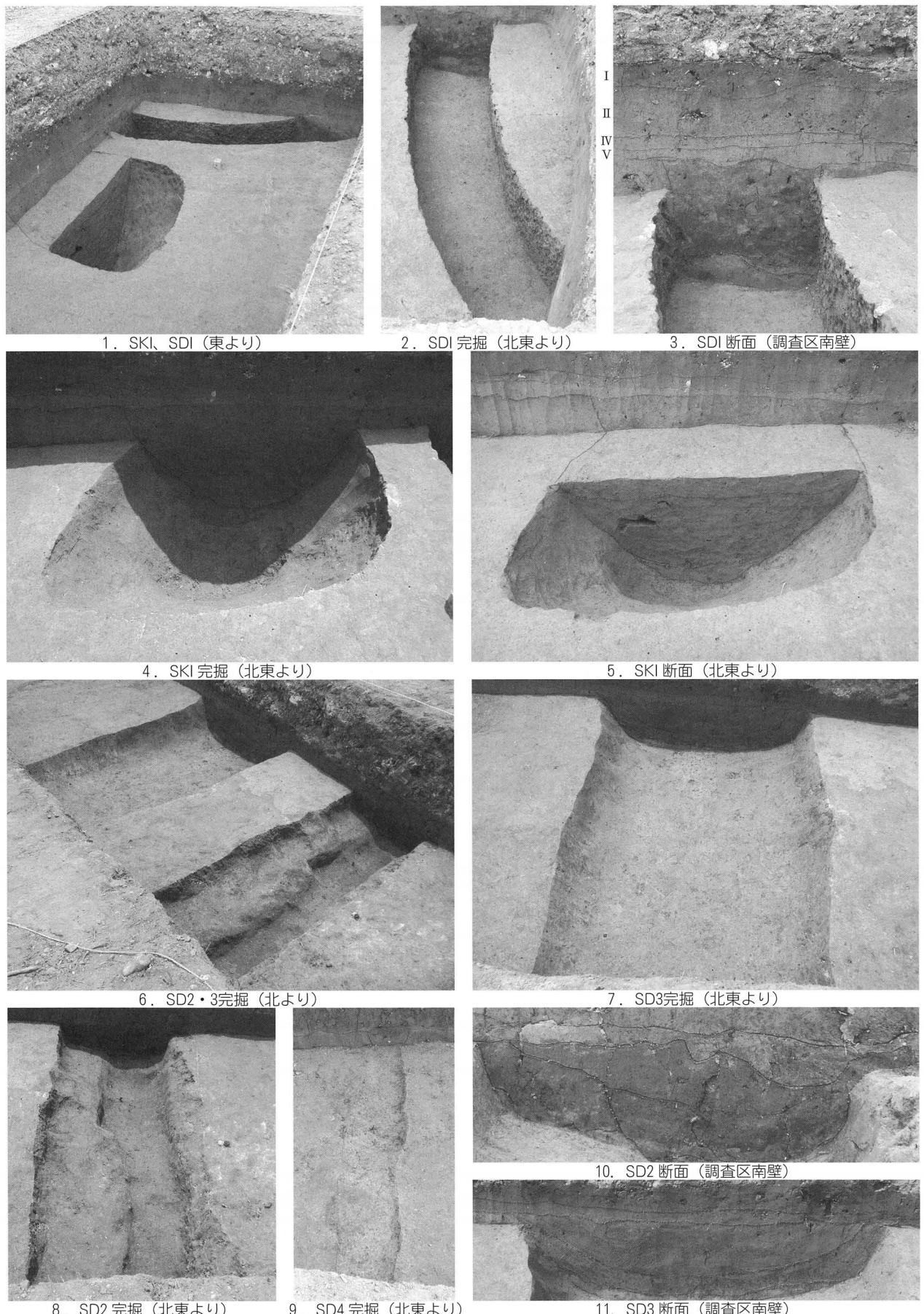
＜遺物＞ 区画からは肥前産磁器、相馬産陶器、蹄鉄などが出土している。また水路内からは 163 点の遺物が出土した。17~19 c 前半の陶器・磁器が多数を占め、特に 18 c のものが多い。肥前産磁器、相馬産陶器が多く、他に小野相馬産、大野相馬産、美濃産、唐津産、堤産、岸窯系の陶器が出土している。漆器や砥石、硯、土人形、古錢なども出土しており、同様の年代と考えられる。また中国産磁器、瀬戸美濃産陶器など 16 c 代に遡る資料が各 1 点見られる。他に中世陶器が 3 点出土している。

IV まとめ

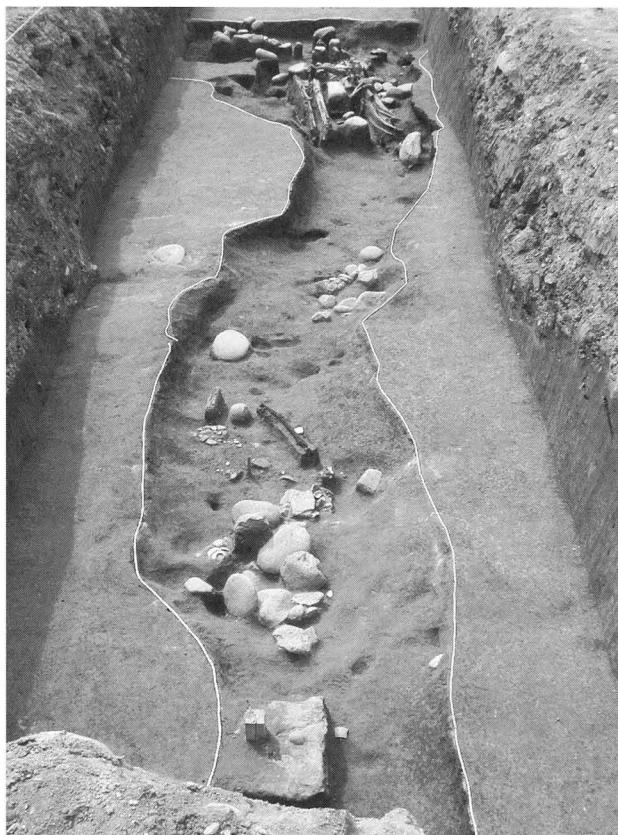
- ・王ノ壇遺跡 5 次調査では、土坑 1 基、溝跡 4 条、IV 層水田跡が検出された。検出面は全て VI 層上面である。
- ・基本層の内、I・II 層は水田耕作土である。また III・V 層も土質及び層相より水田耕作土である可能性が高い。
- ・遺構の年代については、SK1 が 16 c 末から 17 c 初頭、SD1 は古墳時代まで遡る可能性も考えられるが、断定はできない。SD2~4 については、古墳時代から近世の間に位置付けられるが、1 次調査 I 区から検出された中世における全体区画溝の延長方向に位置しており、これらに対応する可能性が高い。特に SD3 については、下層に粘土層、上層に砂層という堆積状況が区画溝に類似する。IV 層水田跡については、水田の有無により 2 時期の変遷が認められた。水路の取り付く古段階のものは 16 c 以降につくられ 19 c 前半頃には埋没したものと考えられる。新段階のものは幕末頃に形成されたものと思われる。なお耕作土のみ検出の II 層水田跡は、明治以降のものである。
- ・水路跡から検出された水利施設については、T 字形水路の合流部分に設置されている点や、杭、自然木が水路の長軸に沿って配置されている点から、井堰であった可能性を指摘したい。
- ・遺物の多くは 16~19 c 前半を中心としたものである（表 2）。特に 18~19 c に集中し、相馬産、堤産の陶器が多い。器種は碗、鍋、灯明皿等が出土している。他に 16 c 瀬戸美濃産、16 c 末~17 c 初頭志野産の陶器が各 1 点出土している。磁器は陶器に比べ年代が古く、17~18 c の肥前産が多数を占める。4 点中 3 点が皿である。他に 16 c 中国産の端反皿が 1 点出土している。
- ・他の遺物としては、漆器の碗、砥石、硯、土人形、古錢などがみられる。これらはいずれも水路内より出土しており、他の共伴遺物より 18~19 c に属する可能性が高い。
- ・また 13~14 c の中世陶器が 3 点出土しており、器種は擂鉢、鉢で、白石窯産など在地のものがみられる。他にはピエスエスキュー、四石、非ロクロの土師器等が出土している。

表 1 出土遺物数量表

遺構名	層位	土師器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	瓦	陶器	磁器	剥片石器	礫石器	石製品	木製品	土製品	金属製品	古錢	合計
SK1	堆 2					1										1
SD1	堆 1	2														2
SD2	堆 2									1	2					3
IV 層水田跡	作土		1					4							1	6
	堆	1	3	1		1	50	6			4	2	6		1	75
	底面	1		1	1	61	13	1			4		5		1	88
総計	-	4	4	2	1	116	19	1	1	10	2	11	1	2	175	



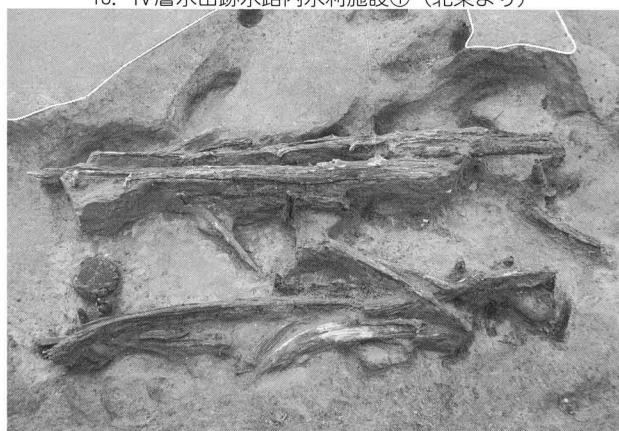
図版1 検出遺構1



12. IV層水田跡水路内遺物出土状況（南東より）



13. IV層水田跡水路内水利施設①（北東より）



14. IV層水田跡水路内水利施設②（北東より）



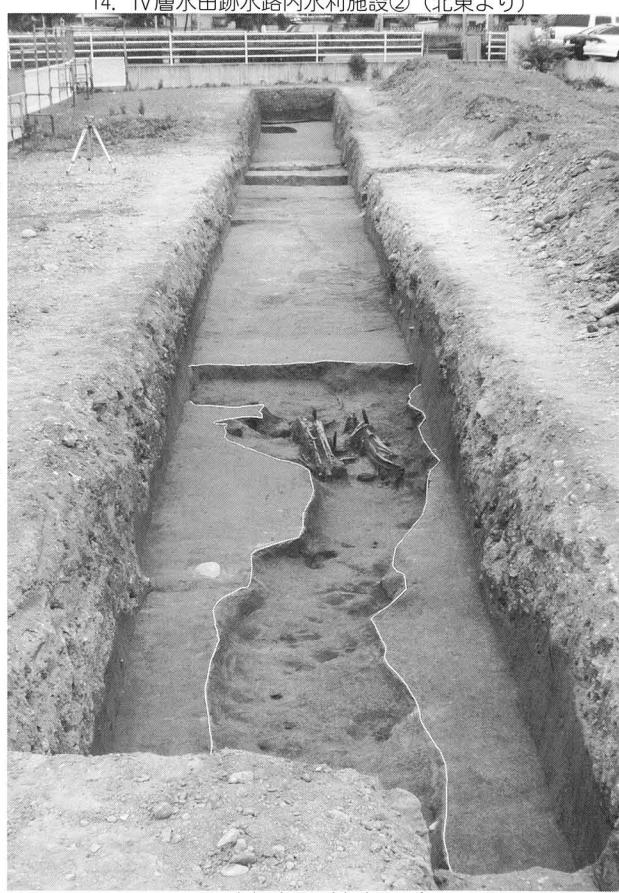
II
IV



II
III
IV



16. IV層水田跡水路及び水利施設（南東より）



17. 完掘全景（南東より）

図版2 検出遺構2



1~15:陶器 16~20:磁器 21・22:土人形 23:土鈴 24:漆器椀 25:ピエスエスキュー 26:凹石 27~31:石製品 32:蹄鉄 33・34:古銭
図版3 出土遺物

表2 王ノ壇遺跡第5次調査IV層水田跡出土陶器・磁器産地別年代別表

産地 年代	白石窯	在地	中国 磁器	肥前	瀬戸 美濃	志野	美濃	岸窯系	唐津	相馬	小野 相馬	大野 相馬	堤	堤?	不明	計
13~14c	1	1													1	3
16c			1		1											2
16~17c						1*										1
17c				1				2								3
17~18c				6					2							8
18c				6			1			29	1	1				38
18~19c										1				1		2
19c										1			3	1		5
不明				1		1			1	12			1	1		17
計	1	1	1	14	1	2	1	2	3	43	1	1	4	3	1	79

*この1点のみSK1出土。他は全てIV層水田跡出土

報告書抄録

ふりがな	おうのだんいせき								
書名	王ノ壇遺跡								
副書名	第5次発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第268集								
編著者名	佐藤甲二・鈴木隆								
編集機関	仙台市教育委員会								
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL022-214-8893~8894								
発行年月日	2003年7月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
おうのだんいせき 王ノ壇遺跡第5次	せんだいししたいはくく 仙台市太白区 おおのだ 大野田 あざきたやしき 字北屋敷	市町村	遺跡番号	04100	01428	38° 12' 50"	140° 52' 40"	20030609 ~ 20030612	126 m ² 共同 住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
王ノ壇遺跡	水田跡	近世	土坑 溝跡 水田跡	土師器 須恵器 陶器・磁器 石器・石製品 金属製品 木製品					

仙台市文化財調査報告書第 268 集
王ノ壇遺跡
－第 5 次発掘調査報告書－

2003 年 7 月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目 7-1
文化財課 022(214)8893-4

印刷 有限会社 サニーデンタルサプライ
仙台市泉区七北田字町 20-1
TEL 372-6810

